

南九州市立大丸小学校 みなみきゅうしゅう
おおまる 五年

気付くことからつながる福祉

上久保 かみくぼ 美穂 みおん

六月に福祉体験活動があり、社会福祉協議会の方々と、三名の目の不自由な方が来校された。視覚に障がいのある方のお話をうかがうのは初めてだったので、どんなことを教えていただけるのか、三時間目が始まるのが楽しみだった。

「皆さん、福祉って、どんな意味があるか知ってますか。」社会福祉協議会の方が、わたしたちに質問された。今まで考えたことがなかったので、わたしは答えられなかった。まわりの友達も、わたしと同じように困った顔をしていた。

「福も、祉も、『しあわせ』という意味があります。㊦だんの㊧らしが㊨あわせであること。」と書かれた画面を見て、なるほど、分かりやすい説明だと思った。特別なことではなく、毎日の生活の積み重ねが大切なのだ。

三名の方は、自己紹介をしながら、持参された私物を見せてくださいました。声で知らせてくれる体重計や、中に鈴が

入っている卓球のボール、「はくじょう」と呼ばれる白いつえ。どれも、初めて見る物ばかりだった。白いつえを上に向けている時は、助けを求めている時だということも教えてくださった。

三時間目の休み時間になると、福祉協議会の方は、目の不自由な方の右うでを支えながら、多目的トイレへ案内されていた。声をかけながら、ゆっくりした速さで歩かれる様子を見て、不安にさせないように、安全に気をつけていらっしやるんだなあと思いました。

四時間目は、点字を打つ活動だった。四年生の国語で、フランスのルイ・ブライユが考え出した六つの点を組み合わせる「指で読む文字」を学習したことを思い出した。

最初は、配られた点字器を使って、ひらがなの「め」を打つ練習をした。わたしたちは、一列打つのにとても時間がかかったが、盲学校を卒業されたという方は、比べものにならないくらいの速さで、まるで見えているのではない

かと思うほどだった。盲学校の一年生の子どもたちも、この練習から始めるということを初めて知った。

次は、自分の名前を打つことに挑戦した。点字の読み方表を見ながら、小さいわくの中に、一文字一文字打っていく。だれもしゃべらず、真剣な表情で手を動かしていた。「かみくぼ みおん」の「ぼ」は、だく点があるので七文字の中で一番難しかった。

ようやく打ち終わると、三名の方の前に持って行き、正しく打っているか読んでもらった。紙をわたして待っている間、まちがっていないか少し心配だった。

「かみくぼ みおんさんですね。」と、にっこり笑って読んでくださったので、ほっとしてうれしくなった。

この日の体験活動を通して、視覚に障がいのある方の生活に役立つさまざまな道具があることや、わたしたちにもできるサポートがあることを学ぶことができた。

この活動をきっかけにして、国語の「みんなが過ごしやすい町へ」の学習では、盲学校についての調べ学習をした。六才から大人の人まで勉強していることや、校舎内の廊下に点字ブロックがあること、点字の教科書は、わたしたちが使用している教科書の何倍もの厚さになること、自宅が遠くて通学が困難な人たちは寄宿舎で生活していること等、広幅用紙三枚にまとめた。みんなに読んでもらい、盲

学校のことを知ってもらうことができた。

祖母と買い物に行った際、目の不自由な方が立ち止まっているのを見た男性が、その方の左腕をとって車まで一緒に歩いている光景を目にした。困っていることに気付いて、素速く行動に移せる人は、素晴らしいと思った。「気付くこと、そこから幸せは始まります。」

社会福祉協議会の方が教えてくださったように、周りのことに気づき、自分にできることを考えて行動できる人になりたいと思う。

綾部市立綾部小学校 六年

伯父さんからのプレゼント

小畑 智啓

毎年、僕の誕生日やクリスマスになると伯父さんからプレゼントが届く。そのプレゼントは、百円ショップに売ってある文房具やおもちゃだ。伯父さんがプレゼントをくれることは嬉しいけど、

「なんで、いつも百円ショップのおもちゃしかくれないんやろ？ゲームとか買ってくれてもいいのにな。」

と、密かに思うことがあった。しかし、ある時、祖母から伯父さんの工賃の話聞いた。その話を聞いて、伯父さんのプレゼントに対する思いが変わった。

伯父さんは、「あやべ作業所」という所に通って仕事をしている。仕事は、醤油作りで、伯父さんは醤油の瓶を洗う作業を毎日頑張っている。夏は暑く冬は寒い中での作業だけだ

「たくさん給料をもらいたいんや。」

と言いながら毎日休まず仕事に行っている。頑張って仕事をしている伯父さんだけ、ひと月に貰える工賃は一万円

位しかない。祖母が教えてくれた。その事を知った時、僕はとても驚いた。伯父さんは、自閉症という障害があるけど、昔は工場で鉄を作って、たくさん給料を貰っていたそう。障害があるのでできないこともあるけど、工場で仕事をする力も持っている。だから、伯父さんの工賃は少ないと思う。僕は、伯父さんのように障害があっても、社会のために自分の力を活かせる場所が増えて、障害のある人も頑張った分、給料を貰えるような社会になっていけば伯父さんも嬉しいと思う。

伯父さんの工賃の額を知った時、自分が今まで伯父さんに貰ったプレゼントを思い出してみた。そして、月一万円の工賃の中から僕のために百円ショップで買ってくれたプレゼントは、高価なゲームより伯父さんの僕への気持ちがつまったプレゼントだったと気付いた。だから、今まで伯父さんから貰ったプレゼントも、これから伯父さんから届くプレゼントも、大切にしたいと思う。伯父さんのプレゼ

ントから、僕は百円の重みや伯父さんが僕のことを思ってくれる優しい気持ちに気付くことができた。

茨城大学教育学部附属小学校 四年

車くるまいすが教おしえてくれたもの

澤幡さわはた 遼眞りょうま

「車いすは、みんなの足になる。」

ぼくは、三年の四月の始めに、大たいこつ頭すべり症という病気になるしました。原いんは不明で、すぐに手じゅつをしないと歩けなくなってしまうとお医者さんから言われて、ぼくの頭にイナズマが落ちました。ぼくにとって、歩けなくなってしまうという不安と、どうしてこんな病気になるってしまったんだろうという悲しみが一気におそって来ました。だけど、それい上につらかったことは、手じゅつの後、車いすになってしまったことです。

ちよつとの段差が行けなくて、頭に来ます。今までバスで通っていた小学校には、車で送ってもらうことになって、友達と帰ることもできなくなりました。大好きだった体育の時間は、いつも見学したり保健室にいたり。早く体育をやりたいなあ、つまらないなあ、と思っています。トイレの時には、ズボンをぬいだりはいたりするのが難しかったし、段差が大きい所や入れない所は、いつも遠回り

でとてもめんどうです。ぼくの口ぐせは、いつも「サイテー」になっていました。

運動会の際には、車いすからみんなをおうえんしていました。みんなに伝わるように、大きな声で「がんばれー！」と言いました。友達の中には、「車いすで楽で良いよね」と言う人がいたけれど、本当はぼくだってみんなと一しょに走りたいし、競争したかった。車いすだからって、楽ではないのです。でも、先生は車いすのままおどれるダンスを考えてくれました。みんなとおどれてとても楽しかったことを今でもよく覚えています。友達も、車いすをおしてくれたり、だいじょうぶ？と声をかけてくれました。家族は、運動会に参加できたぼくをととても喜んでくれました。

車いすになって気がついたことがあります。それは、いつも教室の前の段差を上がる時は友達が押してくれること。車いすのタイヤを回すと、自分が走っているよう、わくわくする時があることです。

お母さんが働いているかいごしせつでは、車いすを使っている人たちがたくさんいます。毎年夏祭りのお手伝いをしていたり、ボランティアをしていた時は何も感じなかったけれども、今は足の不自由な人の気持ちが変わります。

ぼくは今、リハビリをがんばって歩けるようになりました。走ったり、体育の授業に出ることはまだむりですが、だれかの車いすをおすことができます。車いすは、人をささえるもので、なければ足が不自由な人はどこにも行くことができません。たくさんの方がどこへでも行けるように、こんどはぼくが、だれかの背中をおしてあげたいです。

とうきょうがくげいだいがくふぞくたけはや
 東京学芸大学附属竹早小学校 二年

言葉がでなくても…

しらと
 白土 治子

にには言葉をはなした事がありません。小学校5年生ですが、まだおはなしができません。

お母さんに聞くと、発達しようがいでおはなしすることができないという事です。言葉はできませんが、ジェスチャーや、「ばばばば。」などのににに語で私たちと会話していただきます。でも、字も書く事ができないので、ににの本当につたえたい気持ちをわかってあげられない事がたくさんあります。

ににははじめての場所やなれない場所も苦手です。そういう所では息があらくなったり、はいてしまったりすることもあります。説明しなければ、見た目ではにににしようがいがあることがわからないので、外出するとまわりの人はこういうにににの様子を見てへんな目で見たりします。楽しくなると大声をあげてしまったり、何か質問されても答えられなかったりして、いやな言葉をかけられる事もあります。その度にお母さんは「すいません。すいま

せん。」とあやまっています。ににはとてもやさしくて、みんなが喜ぶ事がすきで、じゅんすいで、道じゅんなども、いちいち、「しようがいがあるから…」とせつ明しなければいけない今のじょうきようがふしぎです。

私はいつか、いろいろな人がいる事があたりまえの世界になつてほしいと願っています。ふつうに生活しているのに「すいません。」とあやまったり、せつ明したり、何かしるしをつけたりしなくても、にににの様な人も楽しくくらせる社会になつてほしいです。

◇心の輪を広げる体験作文◇

弟おとうと

ぼくには、6才年下の弟がいます。弟は、障害を持って産まれてきました。弟が出来てすぐ、うれしかったので、産まれてすぐに顔を見たかったけれど、とても小さく産まれたので、NICUという所に入っていて、会えたのが、産まれてから、10日後のことでした。やっと会えて、うれしかったけれど、まだごしでしか会えなかったので、抱っこ出来ませんでした。抱っこ出来たのは、たいいんした2ヶ月後でした。弟が家にきて、ぼくは、大切にしようと思いましたが。弟は重い障害があるので、ごはんを食べるのも、1時間ぐらいかかります。お母さんが、いそがしい時は、ぼくが食べさせるのを手伝ったりします。耳が聞こえないので、弟の思っている事がわからなくて、困ってしまいます。おなかがすいているのか、あついのか、ねむいのか、何で泣いているのか分かりません。留守番を弟と2人でしている時に、泣き出して、抱っこしても泣きやまない時は、ほんとうにどうしようかと困ってしまいます。なんとか、

お母さんが帰ってくるまで、抱っこして、がんばっています。そんな弟ですが、いい所もあります。ねている顔や、笑顔がとても、かわいくて、たまりません。笑顔は、くしゃくしゃになるぐらい笑います。弟の笑顔を見たら、ものすごくおどろくのではないかと思うほどです。現在、弟は、5才になります。ふつうの5才だったら出来る事も、弟は出来ません。言葉をはなす事も、歩く事も、ごはんを自分で食べる事も、着がえる事も、一緒に遊ぶ事もできません。でも、ぼくにとっては、いつまでも赤ちゃんみたいで、かわいいです。出来ない事は、家族で手伝ってあげて、協力しあっています。最近、弟が出来る様になった事は、トイレでうんちが出来る様になった事です。ふ通の人だと、あたりまえだと思えますが、弟にとっては、すごい事です。ここでぼくが思うことは、ふ通の人では、たいした事じゃなくても、障害のある人にとっては、大変な事だということ。何か1つ出来るようになるには、すごい努

むかえ
向江
ゆきや
由輝也さがみはら
相模原市立弥栄小学校
五年

力が必要です。だから、ちよつとした事が出来ただけでも、
すごく、うれしくなります。こんな、ゆつくりな成長の弟
ですが、ぼくの大好きな、かわいい弟です。この次、何が
出来るようになるか楽しみです。